

十六世紀、アイルランドのキルカラという場所に一人の魔術師がおとずれた。その魔術師は願いを聞き入れるといううわさだが、本当は人をだまし実験や※キメラを作るために人間をだまし続けて利用してきた。それでも人はそいつを善人だと思いついでいる。うわさによると、魔術師は灰色の瞳、銀色の長い髪に白いはだ、指にはなぞの黄土色の指輪をつけているといわれている。まさにうわさっぽい。ある日、少年が街を歩いていた。みんななぜか忙しそうにしていた。板やくぎを持って走ってる大工職人やわらを積んだ馬車、野菜やらをかついでる農家の人がいる。やはり何か起きている。少年は告知板の場所へ行って見た。そこには一枚大きな張り紙がケルト語でこう書いてあった。

※同一個体内に異なる遺伝情報を持つ細胞が混じってること、またそのような状態の個体

『五月十五日キルカラ州祭りを行う故、皆準備をしてもらいたい』

下には小さくキルカラ州市役所と書いてあった。そうです、五月十五日は祭りが行われる。だから人々は忙しくしている。少年はそれを知り一目散で家へ帰った。少年の家は農家だった。町はずれの森に近い畑で野菜を作っていた。少年は家の古びた扉を開け中で食事の準備をしていた母親に興奮しながら言った。

「母さん、大変、五月十五日祭りが行われるみたいで・・・」

「ええ、知っているわよ」母親は子供が話すのをさえぎって言った。

「えっ、知っていたの。」少年はおどろいた表情をしていた。

「何で言ってくれなかったの、それに作物は。あと一カ月しかないのにどうやって育てるの」「そうよね、先週はやつとのこととでジャガイモが育ったのに売ってしまつて、それに雨が降らないから作物が不足してどうしたらいい

のかしら」母親は困った顔で座り込んでしまった。

「あの祭りは古くからやってきてるの。やらないとご先祖様に申しわけないし。」確かに、ご先祖様も行った祭りをここでやめたくない。他に、キルカラ州の村人や協力し合っている人たちにも無礼だと少年は思った。少年は母親の食事の準備を手伝い二人で食べた。

「今年も僕たちが作物を収穫して街へ持って行かなきゃいけないの。」

「ええ、もちろん。わたちたちは農家ですから。」

「そうか、僕もできる限りの事はしてみよう。」少年は母親の手を固く力をこめてにぎった。「ありがとう。そうだわ、それなら森へ行って木の実をとってきてくれる。そうしたら祭にも役立つわ。」

「わかった。できるだけ取ってくるよ、日が暮れる前までには戻ってくるから。」少年は母親にそう言いながら机にあった袋をとって

出かけて行った。森の中は少し薄暗く、木の影で所々光が入るだけだった。しかし、森には薬草や木の実、きれいな花がたくさん咲いていた。緑豊かな森で小鳥のさえずりを聞きながら少年は木の実を取っていた。夕方、少年は森を抜け出し家へ帰った。家へ帰ったら父親が土まみれでイスに座っていた。

「やあ。母さんから聞いたぞ。森へ木の実取りに行つてたんだと。頑張ったな。」

「いいや、父さんのほうがすごいよ。朝から夕方まで畑仕事なんだから。」

「まあ、それもそうか。」

三人は晩ご飯を食べすぐ寝た。一週間ほどたち畑はやつとの事で耕せた。今度は種蒔きだった。でも父親はどんな種類の種を蒔けばいいのか分からず広場の案内所へ少年と一緒に行った。二人は会話をしながら歩いて三十分ほどたつて街に到着した。街の中の人たちは以前よりもっと忙しそうだった。父親と少年が広場に行つてみると人々が集まっていた。

店は四店くらい開いていて他は組み立てていたり、設計図を用意していたりみんな協力し合っていて少年は自分も頑張らなければと思った。父親は案内所を見つけ行列があったので二人とも並んだ。だが、行列は全然動かず長い間待っていた。

父親は少年が立っているのがつらくなってきたことを知りこう言った。

「疲れたか。ここまで付き合ってくれてありがとな。家へ帰っていいぞ。種は自分で持つて帰れるから、心配するな。」

「いいの、でも・・・」

少年は父親のそばにいて手伝うべきか父親のそばを離れて先に家へ帰るか迷ってしまった。でも足はくたびれて限界で耐えられなく家へ帰ることにした。最初は歩いているときは痛みを感じていたが歩いて時間がたつほど痛みを感じなくなってきた。少年は痛みを感じなくなっていて歩いて途中もう一回父親に会おうかと思っただけ振り向いてみたら、太陽を

背にして藍色のコートのフードで顔が見えな
い人物が少年の後ろを歩いていった。でも少年
がよく見るとその人物はまた後ろにいた人物
に追われていた。藍色のコートの人物が道を
変えたり止まったりすると追っている奴は同
じ動きをした。藍色のコートの人物は早歩き
を始めた。だんだんと、少年との距離が近く
なって少年は思いついた。コートの腕をつか
み走った。やはり追っていた奴は後をついて
走ったけれど少年は暗いわき道へコートの人
物と逃げ込み追ってきた奴はそのまま走って
行った。少年は人物の腕を離した。とても早
く走ったので疲れて息が荒くなっていた。
「ありがとう」突然、風のように現れた声は
無気味に聞こえた。
「さつきはありがとう。」また繰り返した。
少年がまるで何も聞こえてないような表情を
していた。
「あっどういたしまして」その時少年は息が
切れてしゃべり続けられなかった。

「よくそんなに走れたね。無茶な事して。まあ休みな。」少年は人物が言ったことが少し頭にきた。何分か経って少年は人物に言った。「どうして追いかけていたんですか。」少年は冷静に聞いた。

「ちよつとね。」

「ちよつとねじゃわかりません、ちゃんと説明してください。」

「はあ・・・」人物はため息をついた。

「この町の祭りの協力を何もしなくて、そしてたらあとをつけられたんだよ」少年は驚いていた。

「えっこの町がそんな事をするなんて。」

「市役所へ行って聞いてみたけれど旅人、住人、老人や子供まで協力し合ってやっている祭りだと言っていてね僕はそれを反対してね。

そしたら後をつけられた。これで説明は終わったよ。わかってくれたかい。」少年は自分の町がそんなにひどかったのがショックで頭の中が真っ白だった。

「この町は気に入らないな。」奴が言った。少年は人物の顔を見上げた。暗いわき道の陰で見えなかった。実に不気味だ。

「あなたは誰。」

「僕・・・。そうだね、世間の間では魔術師と呼ばれているかな。」

「魔術師・・・。」少年は少し考えた。

「ということは魔法とか魔術とか使えるの。」

「魔法と魔術は違うよ君。」

「そうか」少年は納得していた。魔術師と会うのは初めてで何なのか知らなかった。

「そうだ、助けてくれたお礼にこれをあげるよ。」

魔術師は血に染まったような赤い袋を少年に差し出した。少年は吸い込まれるような眼差しで見とれていた。

「君の家って農家なんだろ。これならきつと役立つよ。」

「何。」

「特別な土だよ。畑に埋めれば作物は腐った

り枯れたりせず、ちゃんと芽が出てくるよ。」

「本当に。」

「ああ」少年は魔術師がかすかに笑ったように見えた。

「よかった。今本当に作物の育ちが悪い季節で困っていたんだ。ありがとう。きっとこれで父さんや母さんも喜ぶと思う。」

「大事に使ってね。」

魔術師はわき道から出る時こう言った。

「会いたい時は必ず君が願う所にいるよ。」

魔術師はそう言って人々の中に混じって姿を消した。少年は魔術師が暮れた袋を持って家へ帰った。畑へ行つて、まだ父親は帰っていないのを確認して畑の中へ入り袋を開け土をまいた。土は畑の土と変わらなく目立たなかった。その後、父親が種を持って帰ってきた。父親は畑へ行つて種をまいていた。少年は気づくがどうか怖く心配だったが父親は気づかなかつた。あれから二週間たった。作物は順

調に育っていった。でも少年は一つ困ったことがあった。それは両親が疲れているように見えたから、特に父親は。

少年はもう我慢できず母親に聞いてみた。

「母さん、このごろ疲れているよね。特に父さんはもつと。」

「あらわかっていったの。」母親は答えた。

「どうしてか理由を教えてください。」

「ええ、それがね私たちの畑以外の畑に異変が起こっていてみんな困っているのよ。それに私たちだけの畑で野菜が育っても祭りのためには不十分で原因もわからないのよ。」少年ははっとした。≪まさかあの土のせいで≫突然少年は家から飛び出して畑へ向かった。少年は恐怖におそわれていた。自分のせいであの土を埋めたから人々に被害を与えていると。畑にたどりついた時はどこに土が埋まっているのがわからなくなってしまった。ただ頭にあったのは土を除くことだけだった。そしてたまたまどこからか前に聞いたような声が聞こ

えた。

「あーあ、失敗だ。やっぱり強い呪いほど土や種も強くなきやいけなかったか。これ以上育ったら逆に枯れてしまうな。」

少年が振り向くと後ろには吸い込まれるような灰色の瞳、銀色の髪、日に当たって透明に見え、その顔のほほ笑みは不愉快に見えて、喜怒にも見えた。少年はびっくりして尻もちをついてしまった。

「あれ、驚かせちゃった。」

「お前・・・あの時の魔術師。」

「よくわかったね。声だけで聞き分けるとは。」

「お前の目的はなんだ。」

「目的。」魔術師はいきなり少年に言われたから答えられなかった。

「お前なんだろ、こんな事したのは。そうじやなきやこんな事は起こってなかったはず。

僕に嘘をついたんだな。」

「ああ、まあね。」

「どうしてこんな事を。」

「ちよつと試したかったんだ。最初に土を撒いてその後は僕がつけた呪いで野菜からの栄養を抜いてそれでキメラのための食材か材料にしたかったんだけど・・・どうかな。」

少年は怒りのあまりに魔術師を突き飛ばしてしまった。

「ひどいな。まだ話している途中なのに。」

「あなたは人々を傷つけてなんとも思わないのか。」少年は怒鳴った。

「思わないよ。」

「え。」魔術師のそのあっさりした言葉に少年は一瞬ぽかんとしてしまった。

「僕は苦しみなく人生を生きたい。そのためならどんなことだってするよ、他人を傷つけたって。それが人間でしょ。違うかい。」

「確かにそうかもしれない。人間は知らない間に違う人間を傷めつけたりする。だけどそれはいけないことだ。きっとあなたのやり方は間違っている。他の方法を探せば必ずいい

事が訪れるよ。」

「いい事なんて一度もなかった。」とたんに魔術師が叫びあの重なって見えた表情はどこにもなくなり悩む顔にしか見えなかった。「いい事なんて一度もなかった。いつも一人で頑張ってきた、やり遂げてきた、この方法でやってきたのに頼る人もいないのに方法を変えろだと、無茶な事を言うな。」魔術師は座り込んだ。「僕はいつも一人だった。とうか誰も来なかったし、しゃべらなかった。僕は君ぐらいの時は墓掘り人と呼ばれていた。その名の通り僕は墓を掘っては埋めたりした。誰も墓場には来ないし墓掘り人なんかと話すのはもつてのほか、だから僕はいつも一人だった。それが嫌になって決めたんだ、いつかこんな村を出て旅をするって。そしてこんな苦しい人生から逃げると。旅に出るための金も必要だから薬師も兼ねていたんだ。一生懸命貯めて旅に出た。けれどこの方法しかなかったんだ、あんな人生から逃れるのは。」

魔術師はそこで話を終えた。少年は少し気の毒に思えた。

「なら、ここで住む。」

「何を言ってるんだい。」

「ここだったら面白いよ。緑はあるし、豊かだし、きつとのんびりして暮らせるよ。人々とも仲良くなれるよ。」少年は魔術師を元気づけようとした。

「いいや。僕はこのまま続けるよ。この旅が好きだからね。」魔術師は立ち上がって土をはらいコートを着た。

「ありがとう。元気づけようとしてもした。でもそれは必要ないよ。」

「そう・・・」

「ああ、そうそう、今作物を収穫して抜いたほうがいいよ、いずれは枯れるから。」

「わかった。」少年も立ち上がって魔術師に言った。

「もうこの町から出て行くの。」

「ああ」

「また会えるといいね。」

「なぜ」

「もしかしたらここに住む気になるかもしれないから。」

「それはどうかな。」魔術師はそう言って畑の一本道をまっすぐ歩いて行った。少年はそれをずっとずっと姿が見えなくなるまで見送っていた。

完